都留市寺記

東桂地区

夏狩（桂町）

曹洞宗 金敎魚山宝鏡寺

本寺は静岡県浜松市普済寺。

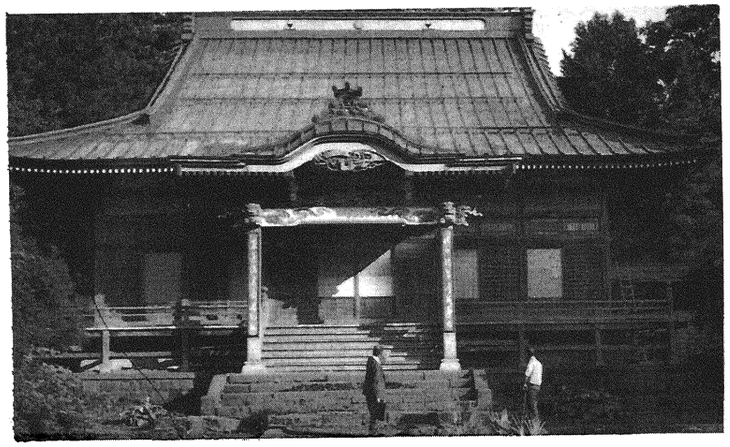
末寺は左記の十六ヵ寺である。

耕雲院（夏狩）　真福寺（小野）　法雲寺（初狩）　仏眼寺（下暮地）　広徳院（境）　長泉院（宮下）　永寿院（十日市場）　光照寺（古渡）　西方寺（宮下）　普門寺（上谷）　泉福院（境）　長得院（小沼）　宝養寺（倉見）　光彩院（十日市場）　棲月院（十日市場）　自得院（十日市場）

本尊由緒

定印釈迦牟尼如来　木像坐体　像長52㎝　膝張り40㎝　面長16㎝　面巾12㎝　脇士　文殊普賢二菩薩　木像坐体　共に像長26㎝　膝張り20㎝

右貞享二年乙丑秋勧請　施主小沼高尾氏柏林道樹居士。仏工江戸住人法橋光清作。



宝鏡寺　本堂

合祀仏

寒巖義尹禅師像。　華蔵義曇禅師像。開山鶏岳永金禅師像。

達磨大師。大権修利菩薩。十六羅漢像。観音菩薩像等、及び、

薬師如来　木像坐体　像長32㎝　膝張り27㎝　文政十年九月、

下谷村住人大仏師文右ヱ門。

聖徳太子像　木像立体（現在の本堂建立記念勧請）

像長182㎝、肩巾51㎝、裾張り58㎝、

興起縁由

創立開山大光東明神師鶏岳永金大和尚の法徳により、檀越と謀り北朝貞和二年丙戌秋（一三四六年）山を開き伽藍建設の発願をなし、主なる伽藍を建立す。二世聖天義賢和尚の代七堂伽藍悉く整備その功多き故当山二世中興となす。天文十年十二月二十六日諸堂残らず焼失。

明十一年再建。永禄年間衆寮並に総門等を新造。慶長六年八月領主鳥居久五郎成次寺領四石八斗を与う。十三世州岩和尚の時貞享元甲子秋客殿再建、十四世大円和尚の時山門を建立す。この和尚寺格を昇進し、祖暁和尚と同時の人にして学才もあり書を能くす。現在の本堂は大正末期、当山三十四世映三和尚の代改築。

開山履歴

大光東明禅師鶏岳永金大和尚。相州鎌倉の征夷大将軍久明親王執権従四位北条相模守平朝臣重時公第九の嫡子にて、人皇九十一代伏見院の時永仁五年五月五日の誕生。成人して浜松の普済寺にて華蔵義曇禅師について得度成道し、その弟子中の十三哲の一人となる。後年甲州に来り内森の丘を望みここに伽藍造営し金鰲山宝鏡寺と称した。

開堂五十八年開山禅師入寂、時に寿齢百六才応永九年八月八日である。

結構規模

〔本堂〕木造入母屋トタン葺にて向拝造りにて 7.5K×7K

〔庫裡〕木造切妻造り 7K×15K

〔付属建物〕豊川稲荷堂 切妻流し造り 3.5K×2.5K。 竜神堂 2K×5K 春日造り。 物置 5K×2K。

歴代住職

開山	鶏岳永金	応永九年八月八日示寂、世寿一〇六歳
二世	聖天義賢	寛正三年十月二十七日示寂世寿九六歳 諸堂建立特功の人、耕雲院開山。
三世	天融義通	天文四年五月十二日示寂 真福寺、法雲寺、宝養寺三ヵ寺の開山
四世	太蒲宗睦	明応元年八月十五日示寂 仏眼寺開山
五世	東陽得春	大永七年四月五日示寂 広徳院、長泉院開山
六世	天翁宗葩	享禄四年六月十日示寂普門 普門寺開山
七世	晦翁宗朔	天文九年八月十五日示寂 耕雲院二世、泉福院開山
八世	直翁宗正	永禄九年十一月二十日示寂 永寿院開山
九世	体岩瑞道	元亀三年十一月八日示寂 光照寺開山、光照寺過去帳には体岩堯道とある
十世	然室牛廓	永禄十一年正月十五日示寂 西方寺万蔵院開山 長得院 楼月院開山 万蔵院は現在廃寺
十一世	根外龍道	寛永十二年正月二日示寂 長得院 楼月院開山
十二世	貴翁牛尊	寛文十一年八月二十三日示寂 自得院開山
十三世	州岩宣陽	元禄十一年十一月十一日示寂 耕雲院三世 光彩院開山
十四世	大円覚舟	元文二年十月二十八日示寂 西方寺二世 山門建立 寺格昇進の特功あり
十五世	融刹応円	宝暦三年十一月二十五日示寂 耕雲院五世
十六世	洞龍岳仙	天明五年十一月二十九日示寂 耕雲院七世 広徳院二世 長泉院四世
十七世	仁証舟寛	寛政十年七月二十二日示寂
十八世	太道祖伯	文化元年八月三日示寂（享和元年） 長泉院七世
十九世	大運弘道	文化十一年正月八日示寂 仏眼寺より御出登

二十世	心月浩潭	文化十二年九月四日示寂 耕雲院十世
二十一世	獅山大俊	文政七年七月二十九日示寂 広徳院四世
二十二世	真光謙宗	
二十三世	大安悦仙	
二十四世	挙一明三	明治十五年一月一日示寂 楼月院 光彩院伝法始祖 西方寺十世
二十五世	祖戒天宗	耕雲院十四世
二十六世	愚庵太癡	広徳院九世（愚庵大痴とある）
二十七世	蘭庭秀光	明治十八年十一月五日示寂
二十八世	不昧東伝	
二十九世	末山禅之	明治二十三年十一月二十三日当山（登院 耕雲院十六世 広教寺二十二世
三十世	真覚活龍	
三十一世	黙外知言	広徳院十一世 永昌院御出登
三十二世	主学明三	
三十三世	大円仏海	
三十四世	一道映三	福源院十四世 西方寺十四世 昭和十六年三月十八日示寂
三十五世	光円時丸	現住 福源院十五世

諸社末社

宝鏡寺稲荷社　御篠明神社

古器什器宝物

開山禅師抖擻の笈 79cm×74×63cm

首楞厳義疏注経十巻 二世聖天義賢和尚書写明応十年三月十七日

正法眼蔵十五巻 仁治年間より寛元年間にわたり写す

法華経一帙八巻

義尹禅師自替一幅 103×29cm

岩上の観音一幅 118×58cm 狩野探幽画

道光禅師画像 120×54cm　天保九年七月二十一日墨狂画

おなん淵の膳一膳 37×33×78cm

獅子像　木造彫一体　安永七年頃の作

仏像

薬師像　地蔵尊二体（石造仏）

宗教行事

開山忌（八月八日）　開山初月忌（一月八日）　仏誕会（五月八日）　宇蘭盆会　春秋彼岸会

民間信仰行事

豊川稲荷初詣祈禱（十二月三十一日～一月一日）

豊川吒枳尼真天例大祭（四月第二日曜日）

伝説

開山大光東明禅師、此の地に来り内森の丘を望みその巌塊上に坐して三年、ある夜半大なる毒蛇が現れ怒って禅師を悩ます。禅師は禅定の威徳により説得して菩薩大戒及び血

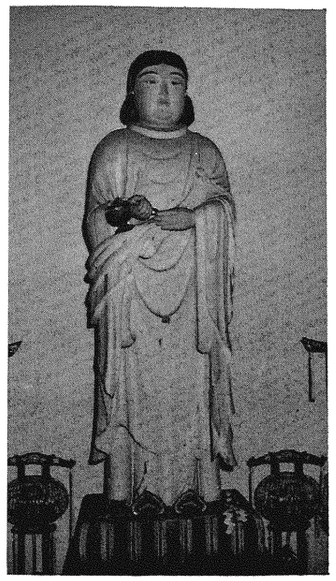
脉を授与す。毒蛇拝して篠の葉に円鏡を捧げ、自今以後我れ此の地を護り、火盗の二難を防ぐと誓う。向後この地域一帯五穀よく実り豊饒の地となる。

禅師は当郡の道俗帰崇によりここに伽藍を造営開創し、山号を金鰲と称し寺を宝鏡寺と名づけた。またこの毒蛇を小篠明神として、此の巌塊上の丘に社殿を建て寺及びこの地域の守護神鎮守として八大龍王を祀る。猶古文書に、宝鏡寺十二世の時十日市場の鎮守として、この八大龍王の内三体を遷座するとある。

開山禅師は、山中村の大森虎三家にて魔物を退治せるという伝説がある。

おなん淵の膳についての伝説もある。

豊川稲荷の伝説あり。



聖徳太子像

宝鏡寺本尊

境

曹洞宗　水辺山泉福院

宝鏡寺末

本堂　泉福院

本尊由緒

十一面観世音菩薩（江戸時代作）木像坐体、像長40㎝、膝張り33㎝、面長13㎝、面巾7.5㎝、郡内六番札所であった。

合祀仏

閻魔大王。達磨大師。

興起縁由

明徳三年（一三九〇）真言宗宝印宗易和尚の開創。甲陽都留郡桂村境字引沢に小庵を結び水岸山泉福院と号した。　爾来二三〇年を経て天文八年勤王義尹和尚の直系、宝鏡寺第七世晦翁宗朔和尚錫をこの地に留め堂塔伽藍を建立し山号を水辺山と改め、曹洞宗に改宗。現在開創（真言宗）より五八五年、曹洞宗になってより三九二年を経ている。

開山履歴

開山晦翁宗朔和尚は、高僧勤王義尹和尚の直系にして、学道大徳衆に秀で功業百端に及び推尊せられ本寺宝鏡寺七世に列せらる。天文九庚子八月十五日示寂。

結構規模

〔本堂〕昔間口十三間、奥行八間の法堂ありしとのこと。明治八年教育令発布により、本堂を枚舎に貸与、その際堂宇を支える丸柱を取り除きたるため、大正三年九月二十三日の大暴風雨により本堂倒潰。昭和三十五年同敷地内に保育舎を設立今日に至る。

〔庫裡〕当院五世円随宣融和尚代の建立と推定され約二二〇年を経ている。（10.5×6K）

〔付属建物〕境内の南側に白山妙理権現の小堂があり、例祭は五月二十三日である。

歴代住職

開山晦翁宗朔　天文九庚子八月十五日示寂　宝鏡寺第七世　耕雲院第二世

二世大円覚舟―三世卍円法舟―四世大機良全―五世円随宣融

—六世大関透玄—七世智照天睿（耕雲院十二世）—八世智聞恵透—九世仏心辨宗—十世智岩了循—十一世愚庵大痴—十二世明庵泰晟—十三世大挙得英—十四世扛山量鼎（てい）—十五世大洋徹学（現住）

古器什器宝物

前机（仏前卓）六世大関透玄代寛政六年（一七九四）堀内助治右ヱ門作。世話人杉田佐内、菅谷半兵ヱ、米山八兵ヱと銘記されている。

釈迦涅槃像掛軸143×94㎝　安政四年二月九世仏心弁宗代

石仏

地蔵尊　六地蔵尊

恒例宗教行事

毎月十日、本尊十一面観音縁日として法要を行う。春秋彼岸会、宇蘭盆会等。

民間信仰行事

観音縁日（四万六千日）毎年八月十日を観音縁日四万六千日と定め法要を行い、夜は納涼盆踊り大会もあり境内賑やかである。

伝説

郡内観音霊場六番札所「よしあしの境の村の泉福院ただ一筋に祈る極楽」と詠まれ、丈夫な子どもが授かる観音さま、また子どもが丈夫に育つ観音さま、霊験あらたかな観音さまとして今もなお地域住民より親しまれ信仰されている。

泉福院本尊及前机

曹洞宗　倉境山広徳院　宝鏡寺末

本尊由緒

阿弥陀如来　木像坐体　像長36㎝　膝張り27㎝　面長12㎝　面巾75㎝

応永年間真言の僧留錫一庵を結構しこれを勧請安置す。

合祀仏

広徳院　本堂

脇侍　善悪二童子　伽羅木像立体。

達磨像、大権修利菩薩、永平祖師、開山得春像、弘法大師、不動明王（厨子入）、誕生仏銅像、韋駄尊天、閻魔王、十王尊等。

延命地蔵尊　木像坐体　像長30㎝、膝張り26㎝、

（境井山真境院の本尊であったものを、統合の際合祀した）

興起縁由

応永年間真言宗の僧来て一堂宇を建営し広沢菴と称した。後廃絶に至りしものを、永正五年徳巌公隆和尚の化導により禅刹となり宝鏡寺の末寺となる。

開山履歴

東陽得春和尚　大永七年四月五日示寂

宝鏡寺第四世太蒲宗睦和尚の法嗣にしてのち宝鏡寺第五世に列せられた。また長泉院の伝法開山である。

結構規模

〔本堂〕当山十三世機外憲三の代、昭和十四年十一月東京都渋谷の福昌寺本堂を移築し現在に至る。（65×85K）書院を含め総坪数六九・五坪。

〔庫裡〕当山八世黙谷泰仙代安政六年十二月十九日焼失、同僧代万延元年正月起工し同年八月落成（9×5K）現在に至る。

歴代住職

創立開山　徳巌公隆和尚　永正五年改宗開山となる。

伝法始祖開山　東陽得春和尚　大永七年四月五日示寂　宝鏡寺第五世　長泉院伝法始祖

二世洞龍岳仙　天明五年十一月二十九日示寂　宝鏡寺第十六世　耕雲院第七世

三世大機良全—四世獅山大俊—五世太濶俊獣—六世禅契越定—七世洞林大宗—八世黙谷泰山—九世愚菴大痴—十世彦寿禅英—十一世黙外知言—十二世大機環堂—十三世機外憲三—十

鹿留宮下

曹洞宗　宮下山西方寺　宝鏡寺末

本尊由緒

甲斐国志には本尊釈迦とあるが、本尊は阿弥陀如来である。

合祀

達磨大師、大権修利菩薩、宗祖道元禅師、開山像等。

開山履歴

当山寺記に次のよう記載されている。

「開山然室牛廓慶長十八年一月十五日寂、
天正癸酉十五年春三月廿八日
当山開闢開山二代大円覚舟大和尚禅師。
当山開祖宝鏡十世然室牛廓大和尚禅師者姓者源氏細川長者高円之第七男也人皇一百六代天皇後奈良院御宇天文十一歳次壬寅三月三日誕生也人皇一百九代天皇後水尾院御宇慶長十八歳次癸酉正月十五日行寿七十二歳而端然示寂矣」と。

結構規

〔本堂〕木造トタン葺　五四・五坪　向拝造り
〔庫裡〕木造トタン葺四八・五坪

歴代住職

開山　然室牛廓　慶長十八年一月十五日示寂　宝鏡寺十世

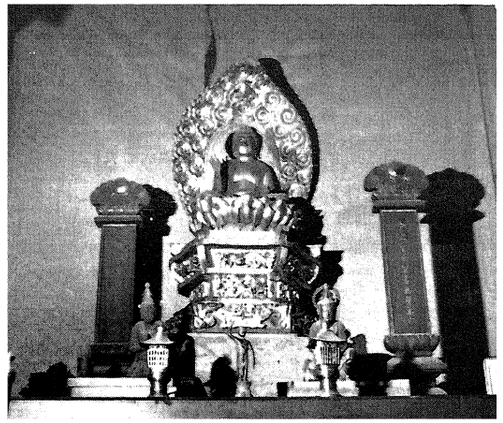
四世憲堂唯尊（現住）

古器什器宝物

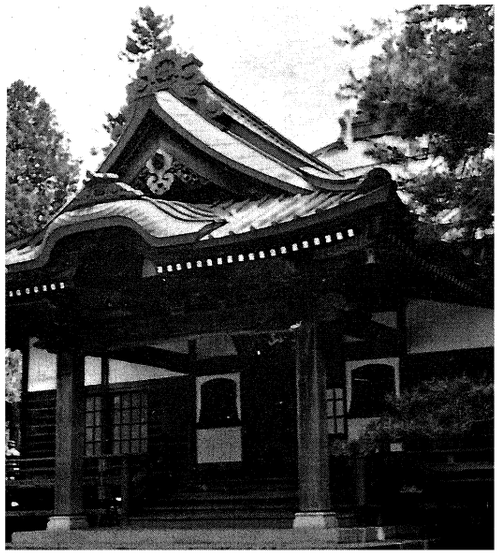
大般若経典六百巻　十六善神掛軸132×60cm、安政六年地獄極楽絵図四幅118×50cm、弘化二年、

伝説

明治維新前までは、富士吉田市上吉田の火祭りの司会者は、当山の住職であったと言い伝えられているが関係資料はない。



広徳院　本尊



西方寺　本堂

二世　大円覚舟
三世　玉峰瑚珊　延享四年二月四日示寂
四世　東山大鳳　天明七年三月四日示寂
五世　台岩泰鏡　文化十年九月二十二日示寂
六世　文海運道　文政六年九月二十三日示寂
七世　大航祖海　文政十一年七月一日示寂
八世　法眼介雲
九世　鉄英霊牛
十世　挙一明三
十一世　謄階舜良
十二世　独竜巨海　新選組隊士立川主税と伝承されている。
十三世　祥林天瑞
十四世　一道映三　福源院十四世　宝鏡寺三十四世
十五世　宗音禅貞　昭和三年六月二十七日示寂
十六世　雲外禅山
十七世　梅谷正虎　現住

寺宝

往来手形　天保十三年当寺より発行のもの一軸

石仏

万霊塔　六地蔵　庚申塔
十三仏石像　従来鹿留門原佐藤倉蔵氏所有の田地に祀られてあったものを、昭和四十七年秋彼岸に当寺へ移し祀られた。
日月型世代墓一基、九世より十二世を合祀、十二世鷹林巨海和尚の生前建立したもので、裏面に、「干時明治十二巳卯年四月八日鷹林巨海志立」とある。因みに巨海は新選組隊士立川主税であると伝えられている。

行事

三朝祈禱会　開山忌（一月十五日）　涅般会　春秋彼岸会

仏降誕会　宇蘭盆会　等

民間信仰

当山位牌堂に馬頭観世音の石像が安置されている。製作年代等不詳なれど、いつの頃よりか掲げ仏として信仰され、願望成就による座布団を供え敷く風習が、この寺にまつわる民間信仰として伝承されている。

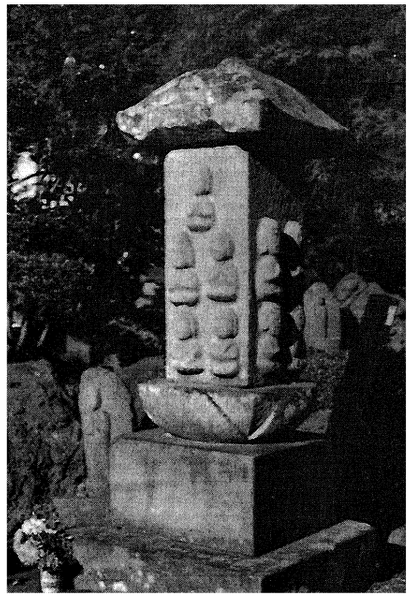
伝説

鷹林巨海和尚と新選組隊士

宮下山西方寺十二世独竜巨海和尚、新選組隊士立川主税（筑前～福岡県出身）は、猛将士方歳三の菩提を弔うため、維新後（明治五年）仏門に入り鷹林巨海と称した。時に三十八歳。巨海は大月強瀬の曹洞宗全福寺十八世鷹林臨峰和尚について修行し、明治八年都留郡桂村鹿留の曹洞宗西方寺の十二世住職となった。巨海は自ら日月の形をした墓碑を建立し次のように刻まれている。

墓碑表　九世　鉄英霊牛大和尚
　　十世　挙一明三大和尚
　　十一世　謄海舜良大和尚
　　十二世　独竜巨海大和尚

墓碑裏　于時明治十二己卯年四月八日鷹林巨海志立



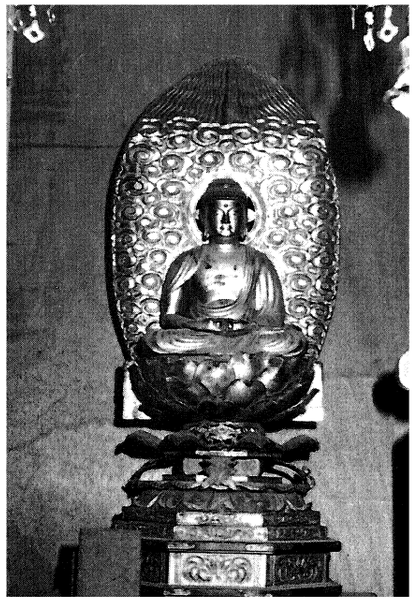
西方寺十三仏石像

墓碑にも位牌にもはっきりと自分の名を刻んで、自費で建立したものと思われる。

明治十年巨海は西方寺から、東山梨郡春日居村桑戸の甲陽山地蔵院へ転住した。

明治三十六年一月二十二日地蔵院にて示寂世寿六十九歳。

地蔵院の過去帳に「南都留西方寺より彩転、明治三十六年一月二十二日遷化、二十三世独竜巨海大和尚禅師、筑前之産福岡県士族」と記されている。（以上続・新選組隊士列伝による。



西方寺　本尊